言葉は度胸！技術も心もいつの間にか、分かり合っているんです。

阿蘇郡高森町の染色家、吉村美子さんは、開発途上国に専門家を派遣する海外貿易開発協会（通産省の外郭団体）に登録。昨年七月から半年間、タイ東北部のコーンケーンで染色の指導に当たりました。今回は、工芸家の目と肌で感じた国際交流を紹介します。

吉村美子さん

●プロフィール
沖縄県出身。昭和30年生まれ。昭和57年に木工芸家の裕明さんと結婚。昭和62年から高森町色見に在住。高森町美術工芸家協会員。

●成長まっただ中のタイ市場

吉村さんが指導に出掛けたタイのコーンケーンは有名な織物の産地。吉村さんは織物工房の二階に泊まり込んで二十人の織り子たちの染色指導に当たりました。「タイの女性たちはとても働き者だし、とても器用。新しい技術をすぐにマスターしてしまう。驚いたことには、商品として翌日には店頭に並んでいるんですよ」。作る片っ端から売れるという活気あるタイの市場。「もう一回染めたらもっときれいな色になるのにと思ったこともしばしばです」。質より量産を第一とする現地のやり方に、芸術家としてちょっぴり不満も。

●タイの生活感覚が好き

タイ語は行く前に一週間のレッスンを受けただけ。でも、仲良しになった織り子さんの結婚式にも参加したり、吉村さんはタイの生活にすっかり馴染んだようです。「タガメ、バッタ、カエル、蚕（かいこ）…。現地の人と同じように何でも食べました。果物はおいしいし、食材も豊富。市場も活気にあふれているんです」。ただ大変だったのは、うだるような暑さと蚊。昼はスコールで水浴びをしてのんびりと過ごし、夜になっても織り続ける織り子たちの生活。「時間に縛られない生活は私の性に合っているみたい」と吉村さん。休日には寺を見て歩き、自分の作品を織り上げたとか。「地方に残る古い織物を直に見ることができラッキーでした」。

織りの指導も行う吉村さん（左）

織り子さんたちとひと休み

●ネパールやブータンにも行ってみたい

「学生時代から青年海外協力隊に憧れていました。当時は何をしてよいか分からなかったけど、今は染色技術で貢献できる」が応募動機。三歳と八歳の子どもたちを残しての派遣でした。「夫も家事から小学校の世話まで大変だったと思います」と言いながらも、「機会があれば別の国にも行ってみたい」と言う吉村さん。夫の裕明さんも「僕が彼女の立場ならやっぱり行きたいと思うだろうし…」と、さすが〝地球家族〟です。

県立美術館収蔵品から リノリウム版画（リノカット）

「すいかのある静物」パブロ・ピカソ作

五九・三糎×七二・九糎

一九五九年の夏、ピカソは従来の版画技法からはおよそ考えもつかないような、きわめて革新性あふれるテクニックを編み出した。その方法とは、普通は多くの版を必要とする多色刷りの版画を、数少ない原版を彫り進めながら、色を刷り重ねていくという画期的なものだった。

この版画には、三枚の原版と八色の色彩が施されている。まず、下地の版で黄色を刷り、別のリノリウム版を彫り進めながら、栗色、水色、薔薇色、緑、紺、黒の順に刷り重ね、最後に、三番目の版によって縁取りのグレーが刷られている。

素朴だが、自由奔放なそのイメージには、ピカソの造形的な天才性とともに、技法そのものの新しい可能性を切り拓こうとする独創性が息づいている。そして、リノリウムの柔らかく彫りやすい素材感は、湧き起こる着想をただちに造形化しようとするピカソの芸術家としての体質にふさわしいものであった。

（学芸課・村上（哲））